香川県立中央病院
Kagawa prefectural central hospital

れんけい

題字：松尾信彦書

香川県立中央病院広報誌「れんけい」第74号　発行者／香川県立中央病院　太田 吉夫　編集／広報委員会
〒760-8557　高松市朝日町一丁目2番1号　TEL.087-811-3333　FAX.087-802-1160

新年のご挨拶

院　長　太田　吉夫

新年あけましておめでとうございます。旧年中は当院の運営につきまして多大なご協力を賜り、誠にありがとうございます。

新病院での診療を開始して、もう少しで4年になります。高機能医療機器等を活用し高度先進医療を提供するとともに、屋上のヘリポートを活用した救急医療などにも力を注ぎ、当院の基本理念である「香川県の中核病院として安全・安心な医療を提供し、県民や地域医療機関から信頼される病院」を目指しています。

ところで、エボラ出血熱などの一類感染症等の患者に対する医療機関として各都道府県に第一種感染症指定医療機関を置くことが求められています。香川県では県知事の判断により、香川県立中央病院を第一種感染症指定医療機関に指定することが決まり、病棟の新築工事を行い2017年1月末に竣工いたしました。この病棟を使わなければならないような事態が発生しないことを祈っていますが、万が一の場合に対応が可能なように準備を進めています。2017年12月には県、保健所、警察等の協力の下、エボラ出血熱疑い患者の患者搬送・受け入れのシミュレーション訓練を行い、準備状況を確認しました。

当院の使命である高度急性期医療の提供という役割を十分に果たすために、急性期を脱し、症状が安定した患者さんについては、地域の医療機関で継続治療が行えるよう、積極的に逆紹介を進めています。香川県においても、地域医療構想の策定が行われていますが、医療提供の機能分化、地域の医療機関との連携強化を図り、地域で効率的な医療が提供できるよう努力して行きます。

今後とも当院との病診・病病連携にご協力頂き、これまで以上に皆様方との連携を深めていくことができますよう、ご指導、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

病院祭にてハープ奏者と

中央NEWS

12/16（土）病院祭を開きました

総務企画課

12月16日（土）、第９回病院祭を実施しました。今年は年の瀬迫る12月の寒い時期での開催となりましたが、院内外から大勢の方々に参加していただきました。

公開講座は、１階講堂にて放射線科の脇隆博先生による「切らずに治す　がん陽子線治療」の講演を、続いてリハビリテーション科の本田透先生による「これからの骨粗鬆症対策について」の講演を実施しました。質疑応答も盛んに行われ、熱気あふれる講演会となりました。

また１階ロビーでは、アコーディオン演奏と歌の「Porta Fortuna（ポルタ・フォルトゥーナ）古田紗弓」さん、アイパル職員と留学生の「アイパル☆ワールドステージ・バンド」さん、ハープ＆フルート演奏「風月」さん、落語の「春日家みっち」さん、よさこい演舞の「さぬき舞人」さん、「丸亀ギターマンドリンアンサンブル」さん、シンガーソングライターの「かんのめぐみ」さん、高松市立木太中学校吹奏楽部の皆様、総勢８組が素晴らしい演奏やパフォーマンスを披露しました。

その他、ちびっこ白衣体験コーナーや人気ドラマの女優さんが着たスクラブの展示など、コーナー自体が人気の撮影スポットにもなっていました。また無料肝炎ウイルス検査や、骨粗鬆症相談のコーナーには多くの方が相談に来られました。さらに近隣の朝日分署から来られた消防士の方々による「起震車体験」「消防車両展示」「水消火器体験」や、物販コーナーでのお菓子の詰め放題、菓子・ケーキ、飲料の販売や、レストランでのパンやランチの特別価格奉仕などがあり、大盛況のうちに幕を閉じました。

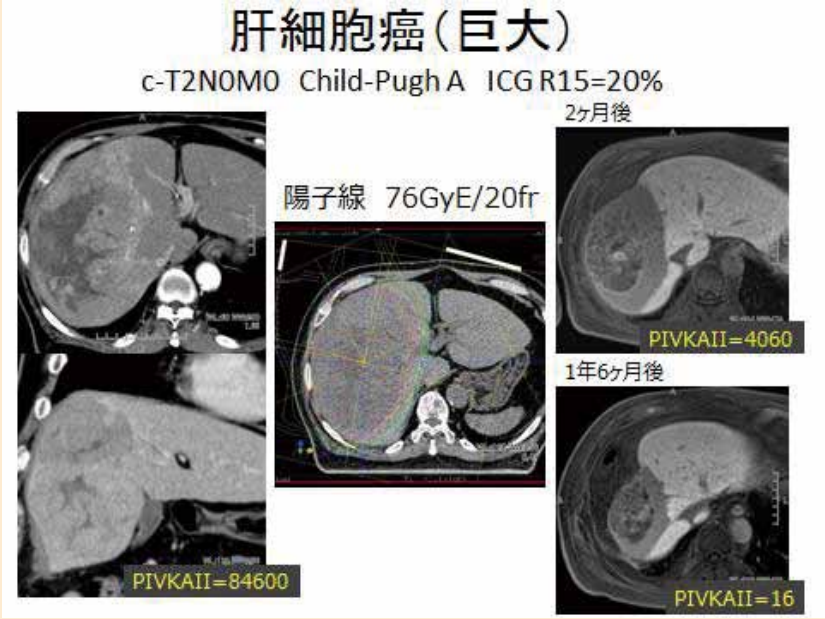
放射線科　脇　隆博

陽子線治療外来が始まりました

昨今、新しいがん治療法の研究が盛んに行われており、中でも注目されているものの１つが陽子線治療です。従来の放射線治療（X線治療）と比べて病変に放射線を強く当てながら、周囲の正常臓器への被ばくを少なく出来ることが特徴です。

10月より陽子線治療外来を開設致しました。岡山県にある津山中央病院がん陽子線治療センターと連携し、第2、第4木曜日に紹介患者の診療を行っています。中国四国地域では初となる陽子線治療施設として、昨年7月に先進医療実施施設として認可を受け、これまでに約150症例の治療を行っています。

対象領域は、肝・肺・前立腺・胆管・膵・食道、脳などで、なかでも肝・肺・前立腺が多い状況です。原発性肝がんは、肝細胞がん・肝内胆管がんの治療を行っています。病変が肝内3-4区域内までに限局していること、Child-Pugh分類A～Bであること、などがおおまかな適応の目安となります。これまでは根治が難しかった巨大肝がんや脈管腫瘍栓を伴う症例でも根治を目指すことが可能となります。肺がんは限局性肺がんや局所進行肺がん、前立腺がんは転移のないものが適応となります。抗がん剤を併用した化学陽子線治療や、より精度の高い照射を目指して金マーカー留置術も積極的に行っています。



陽子線治療が新たな治療選択肢に加わることは、従来治療では根治を目指すことが叶わなかった患者にとって大きな福音です。今後は香川県のみならず四国地域の患者により良いがん治療を提供できるよう、日々努めていきます。

放射線治療センターのご紹介

外来副看護師長　浅香 みどり

手術療法、化学療法、放射線療法はがん治療の３本柱と言われています。放射線療法は臓器の形態と機能を温存できることからQOLを高く保持できるという特徴があり、根治治療から緩和治療まで幅広く、ほとんど全てのがんが治療の対象となります。

放射線治療室で患者さんがどのようにして治療を受けているのか、多職種がどのような業務分担をして患者さんに関わっているのかなど、経験がないと医療従事者でさえも閉鎖的で業務が非常に見えにくく、患者さんにとっても関わる機会が少ない特殊な環境です。そんな治療室で看護師は、患者との密接な接点を持つ立場から患者の状態を常に観察し把握しています。そして最大限の治療効果と患者の安全を確保するための環境整備や治療に伴う副作用の予防と症状緩和ケアを支援し、治療計画に基づいた確実な治療を予定通り完遂できるよう援助しています。

地域がん診療連携拠点病院として、院内だけでなく地域の放射線治療センターとしての役割も担えるようチームで取り組んでいこうと思っています。

2017年 PEACE 緩和ケア研修会を開催しました

緩和ケア内科　部長　仁熊 敬枝

今年も、年1回の緩和ケア研修会が12月2-3日に開かれました。当院研修医7名（初期研修医４名、後期研修医３名）、他院からの医師5名、当院看護師4名、当院薬剤師1名、計17名が受講しました。昨年度までは医師のみで約30名の研修だったので、随分こじんまりした感じです。直前のキャンセルが相次ぎ、グループを組みなおしたり、ポット4台で同時に湯沸を始めてブレーカーが落ちてしまったり、と始まるまでは暗雲が立ち込めるようでした。しかし受講生の皆さんは、穏やかですが、鋭い質問もあり、運営にも協力的で、和気あいあいとした中で、研修をすすめることができました。人数が少ない分、運営もしやすく、より丁寧な研修会だったと感じました。

昨年に引き続き、外部講師として、香川大学医学部の中條先生、三豊総合病院の細川先生をお呼びしました。また新しい講師として、地域連携の講義には、あさひクリニックの西口先生、コミュニケーションのロールプレイには、岡山市民病院の岡部先生に来ていただき、今までとタッチの異なるセッションとなりました。

前回までは、ロールプレイは、概ね医師のみのグループで行っていましたが、今年は、グループ討論も、ロールプレイも、薬剤師あるいは看護師が参加して、多職種での研修となり、これも良かったのではないかと思います。皆さんこれらのグループワークを楽しんでいただいていたように思います。

来年からは、スタイルが変わり、ワークショップ部分のみを１日で行うことになります。

さらに多くの人に参加していただいて、今後も実りある研修会にしていきたいと思います。

中央NEWS

防災訓練を実施しました

業　務　課

9月30日南海トラフを震源域とする大地震を想定した防災訓練を実施しました。

当院は、県内で指定されている災害拠点病院の中でも唯一の基幹災害拠点病院です。地域の救護活動の拠点として、災害発生時には入院患者さん等の安全を確保するとともに、被災地から重症患者受け入れの役割を担っています。

今回の訓練では地震発生後、院内の被害状況を確認し、病院被害は少ないという想定で、被災した患者さんを受け入れる訓練を実施しました。まず、被災した患者さんが病院内に入る前にトリアージを実施し、重症者、中等症者、軽症者に振り分け、それぞれの診療エリアにおいて治療を行い、入院の必要な患者さんを病棟へ搬送しました。

また、災害時対応マニュアルの見直しを行い、新たに役割毎のアクションカードを作成し、マニュアルに沿った対応ができるかの確認を行いました。いくつかの課題も確認されましたが、職員のスキルアップ、災害への対応力の向上へとつながる訓練となりました。

今後もいろいろな災害を想定した訓練を実施し、地域の救護活動の拠点としての役割を担っていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

中央NEWS

医療セミナーを開催しました

10/26（木）

10月26日（木）、本院講堂において「陽子線治療について」と題して、医療セミナーを開催しました。

講演は津山中央病院がん陽子線治療センター副部長　放射線科の脇　隆博先生でした。参加者は医師等38名で、院外からも18名の先生方にご出席いただきました。

今後も、当院における医療を紹介するため、興味ある様々なテーマを取り上げて、皆様のお役にたつ医療セミナーを積極的に開催していく予定です。ぜひご参加ください。

病院言語聴覚士の仕事

～言語聴覚士が行う リハビリテーションについて～

リハビリテーション部　言語療法科
言語聴覚士　主任
武島　章

当院の言語聴覚士は、言語障害、嚥下障害などを持つ患者さまに対して様々なリハビリテーションを行っております。

言語障害には言葉の理解や表出が難しくなる失語症や発音が難しくなる構音障害などがあり、身近な人とのやりとりにも困難を生じます。リハビリでは言語・構音機能そのものの改善を目指す訓練の他、代替手段の活用等によりコミュニケーション能力の改善を図ります。

嚥下障害とはそしゃくや飲み込みが困難になることで、食べる楽しみが奪われる上、栄養不足や肺炎などを引き起こします。リハビリでは嚥下に関連する感覚や運動機能を高める訓練、誤嚥をなるべく防ぐような食事形態や食事方法の調整などを行い、安全な経口摂取と食べる楽しみの回復を目指しています。

いずれの障害も当院入院中に完全に治ることは難しい場合が多いため、転院先等への情報提供を適切に行い、退院後の患者さまの機能・能力の改善や生活の質の向上に寄与していきたいと考えています。

お通じにまつわるうんちく話（その2）

消化器内科　部長　田中 盛富

先日、書店へ行った際、「おならがでてるよ！」とうちの子供が言うので、何事かと思い、学習コーナーへ駆けつけると、「うんこ漢字ドリル」に並んで「まいにち　おならで漢字ドリル」が陳列されていました。「うんこの次はおならなのか！」と、上品とは言えない内容に顔をしかめつつ、出版社の異なる2種類の漢字ドリルを手にとりレジへ。

いま、小学生向けの業界では、「うんこ、おなら」を題材にした商品がブームのようですが、医学、健康、美容など大人の世界では、もう少し上品な響きのある「腸内フローラ」がブームのようです。

さて、腸内フローラ（お花畑）とは、腸内に無数に存在する細菌の種類の多様性を指した用語であり、腸内フローラが、いわゆる体質や、生活習慣病、アレルギー、便秘や下痢など、様々な疾患に関係していると考えられてはいますが、実際のところは、まだ解明されていないのが現状です。その昔、DNA（遺伝子の暗号）が発見され、ある病気になるかならないかは、生まれつきの遺伝子によって影響されると考えられましたが、その後、遺伝子自体は変化がなくても、遺伝子の修飾による影響（エピジェネティクス）が知られるようになり、現在では、エピジェネティクスとしての腸内フローラの影響が研究されています。腸内フローラは、生まれてすぐに母親などの環境の影響を受け形成されるといい、容易には変化しませんが、継続して食事等に注意すれば、よりよい腸内フローラを保つことができる可能性があります。

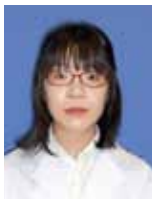
トイレのかがわん

小学生が「うんこ」と言うときは、顔をしかめず、まだ謎に満ちた腸内フローラの世界へ思いを馳せましょう。

医師の人事 異動

転入

（10月1日付）



矢野 肇子

産婦人科

岡山大学出身
（平成26年卒）
趣味/ドライブ、旅行、ジョギング（最近走ってないですが）

全ての女性と赤ちゃんのためにがんばります。

藤原 瑠美

耳鼻咽喉科・頭頸部外科

岡山大学出身
（平成25年卒）
趣味／旅行

耳鼻咽喉科領域全般の診療を行っております。地域の皆様のお力になれますよう、頑張ります。よろしくお願いします。

転出

（12月31日付）

- 松村　光（脳神経外科）
- 松尾　直朗（循環器内科）